



ハートで
ぬくもりと安心を
お届けします

さくらだより

第 32 号

2015年 1月20日

早春の
寒気の中で
咲く梅は
奥ゆかしい美しさ
満ちて香る。

特集

車輜運行部

あいさつ

- FREE フリー
高齢者の趣味と生きがい
- Theme テーマ
子どもの貧困
- リレーコラム
- サービスの色々
配食サービス

新年おめでとうございます。

京都老人福祉協会 総合施設長 中尾 昭子



平成27年の年明けを迎えるにあたり、ご挨拶をさせていただきます。

昨年始めた新規事業は、就労支援「ワークパートナーYUI」、放課後デイ「にじっこ」、藤森デイサービス・うづら保育園分園であり、他に法人内の事業改革で、地域連携推進室・車両運行部、そして事務局が法人事務局と総務部に分されました。事業は高齢分野にとどまらず、ますます障がいや子育てへと進んでいきます。また、昨年12月にうづら保育園はこども園へ申請し、他に着手すべきこともあります。27年度は介護保険改定ですが、年末選挙があったために、詳細決定が遅れています。医療・介護・予防・住まい・生活支援が一体的に提供される「地域包

括ケアシステム」は、伏見地域でも、少しずつ進んでいる手ごたえがあります。このような状況の中で、まずは事業を担ってくれる職員の確保と定着が必須となり、厚労省は福祉人材確保について方向性を示しています。

人のことについてですが、昨年心に残った方が2名ありました。今年、阪神・淡路大震災が起きて20年を迎えます。震災をきっかけに生き方を変えた阪神・高齢者支援ネットワーク理事長の故黒田裕子さんです。26年9月に亡くなられ、12月に偲ぶ会があり、テレビ放映がありました。地域密着型の研修でお話をお聞きしていたのですが、ご自分も被災者でありながら、看護職の職責を果たし救った命に再度息を吹き込むように、

仮設住宅で自分の力で生活していく事を一緒になって考え実行されました。このような方が、すぐ身近におられるのだと感銘を受けたのを、思い出しました。震災直後に法人からボランティアで現地へ出向いたこともあって、被災地のことは今でも思い出します。

次の一名の方は、大河ドラマの黒田官兵衛です。昨年8月30日に京都老人ホーム近くの敦賀町に「伏見城武家地・黒田長政・下屋敷跡参考地」の石碑が完成しました。息子黒田長政が、私の故郷である福岡黒田52万石の領主となったこともあって、歴史上の人物が土地を介して、とても興味深いものとなりました。黒田官兵衛は、天下統一を果たした武将の側近として生涯を生きただけであり、知略

にすぐれていることで、様々な戦略や戦術で活躍した人です。また、人材を登用する能力がすぐれていたと語り継がれる人でもありません。「城よりも人が大切」という台詞が心に残ります。

この黒の名前が付くお二人のことから、こじつけですが、黒色のメッセージを調べてみました。黒色は、気品があり、目立つ色です。メッセージは「私は生きています。生きていたい。活かされたい」とも書いてあって、私の好きな色のひとつです。人が生きることをつなぎ、生きる実感を得られるように、京都老人福祉協会はこれからも、人に学び、地域と共同し、地域社会に貢献する取り組みを積極的に行なうて参ります。

高齢者の趣味と生きがい

平成25年度に内閣府が行なった「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」によると、高齢者の約8割が日常生活の中で生きがいを感じているのだといわれています。60代、70代の高齢者で「生きがいを感じている」と回答した人は年々減少傾向にありますが、80代以上の高齢者では増加傾向にあるようです。では、どのような時に生きがいを感じているのでしょうか。この調査によると、以下のような結果が出ています。



生きがいとは「生きるに値するもの・生きていくほりあいや喜び」のこと。この結果を見ると、生きがいのある生活に必要なのは「良好な人間関係」や「趣味」であることがわかります。

高齢者でも続けやすい・始めやすい趣味とは？

いざ趣味を持つと思うと思っても、何をすればいいのか迷ってしまっ



ことが多いかと思われれます。道具が安価で揃えられるジョギングや読書、デッサンなどは比較的始めやすい趣味と言えるでしょう。ひとつの趣味がきっかけとなり、他の趣味へ興味が広がっていくこともあるようです（デッサンから絵画、など）。ボウリングやゲートボールなどのスポーツはストレス解消や健康維持に効果があり、趣味を通して人間関係も広がっていきます。釣りや盆栽など、自然との触れ合いもリフレッシュ効果がありそうです。

ギャンブルで認知症予防？!

利用者のさまざまなニーズに配慮するために、全国の老人福祉施設

では多種多様なサービスが展開されています。中には、施設内にルーレットやパチンコ・パチスロを置く所もあるのだとか。ギャンブルというとあまり良い印象は受けませんが、もちろん現金を賭けることはありません。ギャンブルを通して他の利用者との交流が盛んになり、勝ち負けによる感情の活性化、考えながら指先を使うことで脳の活性化も期待されます。既成概念にとらわれない新しい取り

組みは今後増えていくでしょう。高齢者に限らず誰だって楽しくないことはたくさんありませんし、退屈な毎日に生きがいを感じることは難しいかと思えます。趣味にしてもレクリエーションにしても、周囲の人が押し付けるのではなく、その人自身が興味を持って楽しめるようなことを提案・提供していくことが「高齢者の生きがいのある生活」につながります。

介護予防デイ

あらゆることが予防になる

介護予防デイ(11月12日・うづら保育園)の様子を紹介します。

介護予防デイでは高齢者への情報発信の場として、これから流行することが予想される病気や、気を付けておきたい事故への対策、講演会への案内などを行なっています。また、認知症予防につながるゲームや体操などさまざまな活動の提供もしています。介護予防デイを担当する職員に話を伺いました。

「高齢者の方が集まって楽しい時間を過ごすというのはとても大切なことです。こういう場に来てくださるだけで足腰の運動になりますし、交通機関を利用したり誰かと関わったりするだけで社会性も失われにくくなります。『他人との関わり・楽しいこと・笑うこと』、そして『今日行・今日用(今日行く所・今日用事)』があるだけで、他に特別なことをしなくても予防になります。」

京都市深草・醍醐地域介護予防推進センター スーパーバイザー 内藤 隆
京都市深草・中部地域包括支援センター 相談員 久保田 香代子

特集

車輛運行部

平成26年度「車輛運行部」が動き出しています。

以前は各事業所ごとに送迎をしていたため、事業所が増える度に車輛や人員を増やすことや、または、送迎を外部の業者に委託する必要がありました。

外部の業者に委託していることで、送迎の時間に介護職員の人数が大幅に減ることがないというメリットはありますが、職員から「利用者さんのご自宅での様子がわからない」「ご家族と直に接する機会が少ない」などの声を聞くようになりました。

「送迎」という機会は、皆様とのコミュニケーションの場として、短時間ではありますが、有効に活用できるのではないかと考えます。送迎車に職員が同乗することで、ご自宅へ赴き、ご自宅の様子を垣間見ることができたり、ご家族と話す機会も増えてきます。また、ご家族が気になること

を気軽に質問できる時間をつくることができ、不安を解消することもできると思います。

現在、主に車輛運行部として10名の職員が、京都老人ホームに活動拠点を置き、深草エリアの事業所である京都老人ホームを含む4事業所と、職員の送迎を行っています。活動拠点のある京都老人ホームの「ショートステイ」、4月に移転した「藤森センター」や「深草センター」は、利用者さんのご自宅と事業所の間を送迎しています。「にじっこひろば（放課後デイサービス）」では、学校へ迎えに行き、にじっこひろばへ送りま

す。帰りは、にじっこひろばからご自宅へ送ります。（下の図がイメージ図です）
エリア内を臨機応変に送迎することで、エリア内を走る京都老人福祉協会の車輛を見かける回数もふえ、利用者さんに安心していただけるのではないのでしょうか。

注意していただくことで事故減少につながります

交通ルールを守る。信号はもちろん、十字路や丁字路では一旦停止し、左右確認。

運転者は、焦らず車の運転の事だけに集中する。スピードは控えめに。道路、交通の状況を常に把握し、早めに対応していく。危ない時は、まずブレーキ、ハンドル操作で回避しないこと。どういう状況であれ、基本、道は譲ること。

歩行者は、横断歩道を渡りましょう。車の陰からの飛び出しは止めましょう。



夜は目立つ
服装をしましょう。

運行部の思い

法人全体で見ると、日々54台の車が稼働しています。そして、自損事故を含め毎月5件ほどの事故が発生している状況です。事故なく、利用者さんを目的地にお送りするのが、私たちの仕事なので、アクシデント・事故などを極力減らしていかなければなりません。車の状況確認、各保険の確認と更新を定期的に行ない、月1回の会議では運行等について話し合うようにしています。

以上のことから今後は、各事業所の送迎業務にあたる運転手の教育や、ペーパードライバーの職員に対しても講習を行なうことで、利用者さんに安心して乗車して頂くことを目的として活動していきたいと思えます。

今後について

右のイメージ図に表したように、運行部は大きく目指すところがあります。職員送迎はもとより、効率のよい利用者さんの送迎、利用者ご家族との深い連携体制、ひいては、地域住民の方々に交えて利用できるバス化を可能にしていきたいと考えます。

地域バス化は地域住民の方々への足となることへの喜びは勿論のこと、京都老人ホームにて生活されている利用者さんの生活、行動範囲の広がりも見込まれます。

「その人らしい生活」の支えの根底となることを車輛運行部は忘れていません。



歩行者が道路を横断する時の注意

① 近づいてきたら、
渡らない

② 止まってくれるとは、
限らない

③ 気が付いているとは、
限らない

信号が…
点滅したら、
渡らない

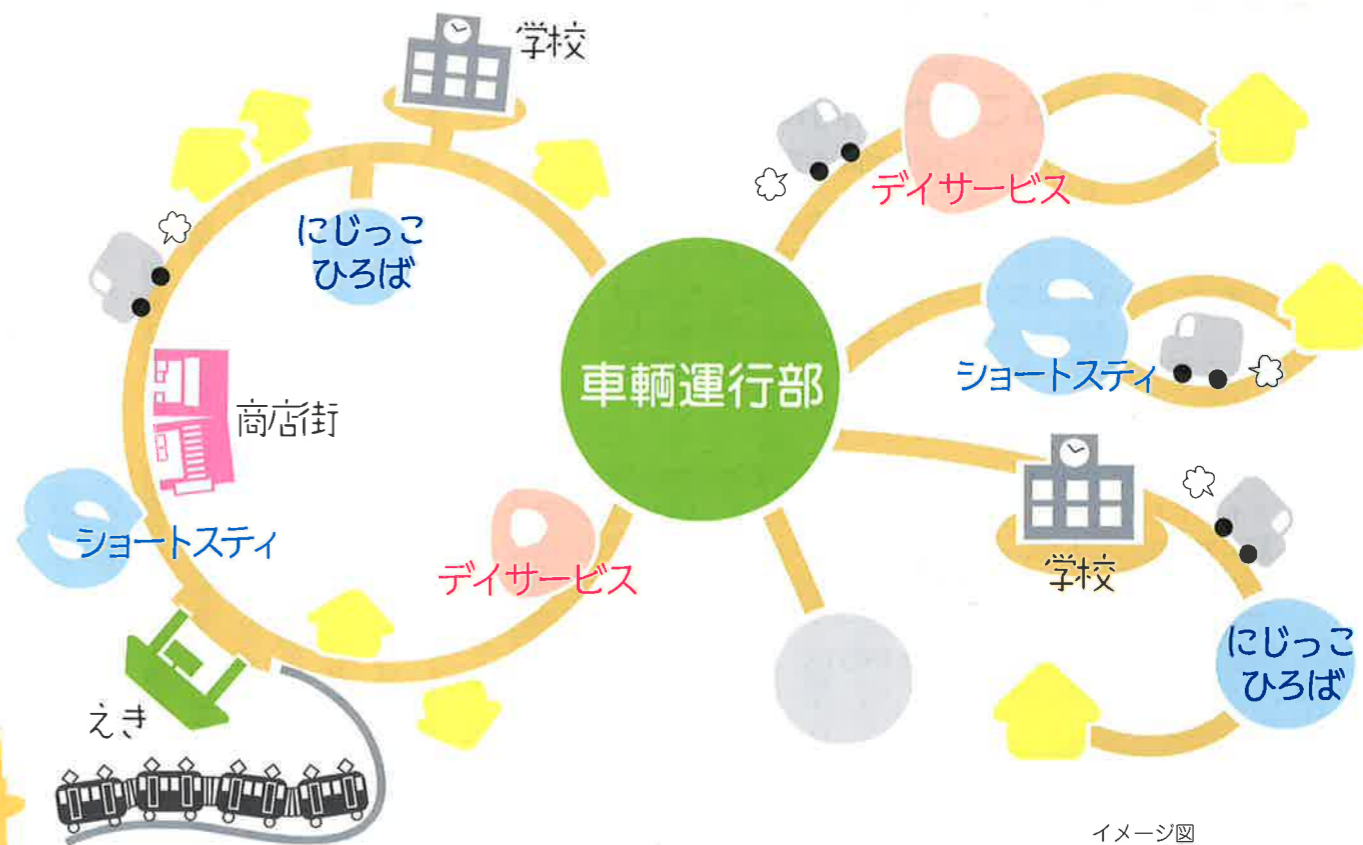
不安を感じたら、
渡らない

職員の通勤方法

京都老人ホームへの通勤手段として車やバイク・自転車の他に電車を利用している職員もいます。最寄りの駅から歩いた場合、急な登り坂が続き、時間的にも体力的にもなかなか大変です。その為、現在、朝と夕方に職員専用の送迎車を運行しています。

通勤時のお願い

通勤時は、朝（7時～9時）と夕方（16時～18時）に事故が多いです。早めのライト点灯を心掛け、左右確認、歩行者の側を通る際は徐行や一旦停止をし、今一度気を引き締めて安全運転をしましょう。



イメージ図

子どもの貧困

京都老人福祉協会では、高齢者だけでなく、支援や介助を求めている方々への支援を考えていかなければいけません。

今回は貧困について、子どもの頃から関わってくる「負の連鎖」について考えていきます。

日本人の6人に1人が「貧困層」

低所得者を示す割合を「貧困率」といいます。貧困率は、低所得者の割合を示す指標です。厚生労働省が2014年7月にまとめた「国民生活基礎調査」によると、18歳未満の子どもの対象にした「子どもの貧困率」は16・3%となり、これは、日本人の約6人に1人が相対的な貧困層に分類されることを意味しています。貧困率が過去最悪を更新したのは、長引くデフレ経済下で子育て世帯の所得が減少したことや、母子世帯が増加する中で働く母親の多くが給与水準の低い非正規雇用であることも影響した、と分析されています。

政府も「子どもの貧困対策」に本腰

子どもの貧困率が過去最悪の16・3%になったのを受けて、政府は2014年8月、「子どもの貧困対策大綱」を初めて策定しました。親から子への貧困の連鎖を防ぐため、教育費の負担軽減や親の就労支援などに乗り出す方針です。

また、各地の福祉事務所ケースワーカーから現場の声を受けて、国は2004年社会保障審議会に設置された専門委員会の検討により、2005年4月から生活保護世帯の高校就学費を「生業扶助」として支給することとしました。2009年7月から小・中・高生に学習支援費の支給も始め、さらに2010年から中学生勉強会等の学習支援を「生活保護自立支援事業」の対象としたのです。

そして、2012年度より、国は、母子及び寡婦福祉法の実施において、「学習ボランティア事業」を新設し、ひとり親家庭に大学生などのボランティアを派遣し、児童等の学習支援や進学相談に応じることになりました。

社会福祉法人である、京都老人福祉協会にも深く関わってくる間



この伏見の地域から見つけたこと

事務局総括主任 田中祥子



平成5年2月1日、私が厨房のパート職員として京都老人ホームと関わりをもった日です。それまで、地域に暮らしながら高齢者福祉の知識も京都老人ホームの存在も知らなかったのです。当時は特養の定員が80名、デイサービスも開設後1年未満でした。デイサービスでの食事の準備を通して利用者の方々や介護職員とふれあい過ごすうちに、平成8年10月には配食サービスの立ち上げに関わりました。そして、平成9年に春日丘センターが次の年開設ということにさきがけ、京都老人ホームにて事務員として働くことになりました。

その後、介護保険制度が始まり、社会のニーズに合わせるべく法人は在宅介護サービス向け事業所が一つ一つ増えていき、平成21年には保育園運営、今年度は障がい者就労支援YU-が始動しています。「老人」から始まった法人は子育て、障がい者と福祉全般の支援へと広がり、大亀谷に一つだった事業所は伏見区内に15箇所、職

員はこの20年で100名から800名近くへと拡大しました。

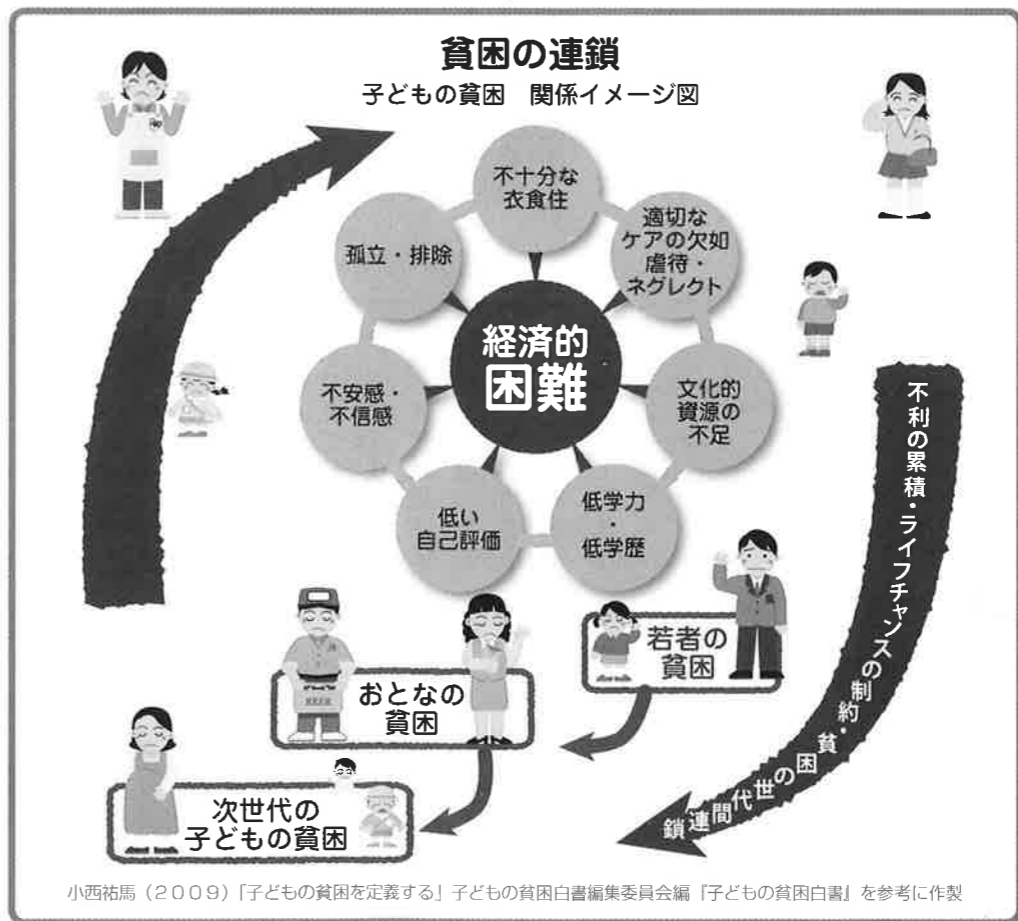
福祉とはすべての人が幸福で安定した生活を営むこと。17年前、職員アンケートで「利用者も職員も安心できる居場所であること」と漠然と答えていました。今の社会は以前より便利ではあるけれど、貧困問題や心無い差別、自然災害や戦争への不安など「幸せで安心」とは言えないことがまだまだあります。そのため、大人も子どももストレスによる心の病気も増えています。高齢者、障がい者、子どもなどハンディキャップがあっても、支援側も含めて一人ひとりが尊重され、笑顔で日々を過ごせるような世の中にするために私たちは強い意志で働きたいものです。

大きなことはできないけれど、私たちが安心して暮らしていくには、今の課題、これから気付き見つけた課題を一つずつ超えていけたらと思います。

まずはこの伏見の地域から、職場として家族から…です。

題です。親の仕事や育児放棄（もしくはネグレクト）などの影響で、ひとり夜を過ごしている子どもがいます。不規則な生活になり、そこから不登校など学校不適応を起こすケースが増えています。そういった子ども達と一緒に夕食を取って入浴し、勉強や遊び、日常的な会話をして過ごすサポートを

することで、子ども達の孤立や、不安感を取り除くと共に、両親は安心して働く事ができます。生活をしていく上で必要な教育を受けることが負の連鎖を断ち切る事となります。豊かな育ちの場を作る事は、私達の法人が目指している事ではないか、という事ではないでしょうか。



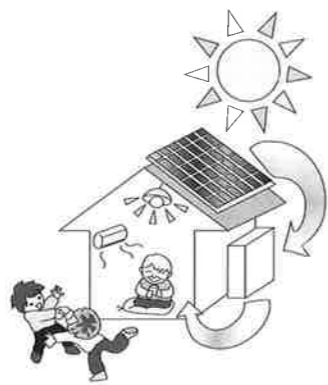
小西祐馬(2009)「子どもの貧困を定義する」子どもの貧困白書編集委員会編「子どもの貧困白書」を参考に作製

今後日本のエネルギーはどいなるべきか？

もともと、我が国はエネルギー資源に乏しく、エネルギー自給率は7%しかありません。日本でできるエネルギー自給としては、大きく3つです。

エネルギー政策の一つとしてCO₂の排出を減らすことは、環境・温暖化対策としても十分、省エネルギー政策となります。2つ目は水力・太陽光などの再生可能エネルギー政策。3つ目は再稼働を巡り議論は続く原子力エネルギー政策です。

平成26年4月から開設した藤森センターほっこりでは、地域再生可能エネルギー熱導入促進事業を使って、太陽熱利用システムを導入致しました。



1階は太陽熱を利用した全自動蓄熱式床暖房、2階・3階にもヒートポンプを利用した蓄熱式床暖房のシステムです。春から秋は、太陽熱でお湯も作ります。

当法人も太陽熱利用システムを導入することで、新エネルギー供給の安定化に協力していきたいと思っております。

編集後記

きっちゃん「さくら」から、広報委員として活動させてもらい2年がたちました。

いろんな方から、特集に合わせたお話を聞き、普段の仕事からは見えない様々なことを広報委員を通じて学ぶことができました。

その中で一番強く感じたことは、知らない所で物事が「つながっている」ということでした。

広報委員会だけでなく、普段からつながりに興味をもって生活していく、他の物事の知識を深めて、多くの方々と交流を図り、広報誌を読まれている方にもつながりを感じてもらいたいと思っています。

広報委員 加藤昇央



配食サービス



配食サービスとは、身体の状況や世帯の状況により、食事を作る事が困難になられている高齢者の方々に、栄養のバランスの取れた食事を配達し、併せて安否確認も行なう事で在宅生活の維持及び福祉の増進を図ることを目的としている京都市の事業です。京都老人ホーム・きっちゃん「さくら」でも配食サービスを行なっています。

また利用される方に対して、同じスタッフを配達に出すようにしています。誕生日にはバースデーケーキやカードをお弁当に付けて配達させて頂いているのですが、それに対するお礼のお手紙なども頂いたりしました。配達時に「前のお弁当は残しちゃった」「昨日のお弁当は美味しく全部頂きました」等、配達時の何気ないやり取りで交流も生まれています。

配達は昼食と夕食の2回あり、夕食の配達と一緒に翌朝のパンをお届けしています。メニューには季節のものは勿論、「御当地弁当」という日本各地の食材を取り入れたものや、京野菜等の食材を取り入れた「健康愛菜弁当」という健康志向のものなど、工夫されています。高齢の方でも食べやすい大きさにあらかじめ調理して提供する「キザミ食」や、糖尿病や高血圧などの持病に合わせた「療養食」もご用意できます。配達は基本的に、スタッフがご本人の顔を見て直接お渡しさせて頂き、安否確認も行なっています。例えば配達に伺っても応答が無く、室内で倒れられていた等の方が一の場合に備え、ケアマネジャーさんと連絡できる体制もとっています。



最近では、配達とは別に「アフターケア」という訪問を行なうって、療養食を利用されている方々の様子や体調を伺うことを始めました。利用される方の

今後について

こういったスタッフとの関わりを通して、普段の様子も伺い、馴染みの関係をつくる事で安心感をもって頂けるようなサービスを行なっています。



スタッフが直接手渡ししています

話を聞き、安心につなげていきたいと考えています。また、今後「日常生活支援プロジェクト」というものも配食スタッフが窓口になり行なっていく予定です。庭の草引きや、電球の取り替え等の介護保険ではまかなう事のできないサービスを支援できるようなくみをつくっていききたいと思っています。

配食サービスを利用される方は、年々増えてきていますが、まだまだこのサービスについては知らない方も沢山おられると思いますので、今後もっと配食サービスの周知と利用を図りサービスを広めて地域に安心をお届けしていきたいと思っています。

